

せんじちゅう だいようひん

戦時中の代用品

(陶製湯たんぽ・羽釜・おろし器、国策弁当函)



岡崎むかし館蔵

資源に乏しい日本は戦争が続くにつれ、戦車や大砲などの武器・兵器を作る材料である金属の不足が深刻な問題となりました。そこで、工場や一般家庭から鉄や銅製品の供出（政府に要請された物を差し出すこと）を求め、家庭からは鉄びんやコップ、さらには金属製のおもちゃまで回収されました。そのため、日用品の多くは金属に代わる材質で工夫して作られた「代用品」に姿を変えました。陶製のスプーンやしゃもじの食器類、おろし器や羽釜など調理道具、湯を熱源とした湯たんぽやアイロンなど、金属製品に代わってより広く使われるようになりました。他にも木、竹、布などを代用して様々なものが作られました。戦時下の国民は毎日の食べるものにもことかく苦しい生活を送っていましたが、不足している物資を知恵と工夫で補い、苦しい時代を乗り切りました。このことが、窯業の盛んな瀬戸で、代用品として多種多様な陶製品が生産され、割れにくい焼き物の開発や、型による成形技術の進歩など、後の瀬戸窯業に欠かせない技術が生み出され、発展につながりました。